

**火山とともに生きる島・三宅島****～生態系と環境が身近な教材・ガイドさんが先生**

帝京大学 経済学部 観光経営学科 大下ゼミ

東京の竹芝埠頭から約6時間半。昨年9月、大下先生のお誘いで、南の島でのリゾート気分で三宅島に随行し、衝撃を受けました。今回は、火山とともに生きている島・三宅島をレポートします。

■ 2000年の噴火によって全島避難を4年間半も強いられた三宅島

夜10時30分に竹芝を出航、翌朝の5時前に三宅島に到着しました。三宅島には港が3つあって、どこの港に到着するかは波の高さと風向きによって決まるらしいです。未明に到着の港を確認した民宿の方が迎えに来てくださり、民宿へ。仮眠ののち、島の体験に向かいました。

役場の隣にある三宅島郷土資料館で、三宅島は約20年毎に噴火を繰り返していること、2000年の噴火では火山性ガスのため全島民避難することとなり4年半も避難されていたことなどを、学芸員さんからお聞きました。2000年の噴火では迅速な避難がなされ、誰一人命をおとした人がいなかったと知りました。まさに危機管理の島。村営牧場の牛も一部は本土に避難したそうですが、中には命を落とした牛もいたそうです。

また、役場の近くには、1983年の噴火で溶岩が集落に押し寄せ、阿古地区の小学校が壊滅した状況がそのまま見学できるようにしていました。生きた展示物から、自然の力の大きさと三宅島が火山とともに生きる島であるという強いメッセージが伝わりました。

■ 三宅島の浜辺はなぜ黒い

翌日は島一番のガイドさんにご案内いただき、さらに詳しく三宅島への理解を深めました。伊豆諸島の浜辺は「白い砂浜」のイメージがありましたが、三宅島の浜は黒っぽく、砂よりも少し大きな粒状の浜。それはスコリアという火山の噴火物であるとのことでした。また、少し赤っぽいところと黒いところがあり、これは噴火した時期が違うとのこと、どれだけ多くの噴火を重ねて現在に至っているかを知ることができました。

森の中を行くと、大きなスダジイの木があちらこちらに。なんと2,000本近くもあるそうです。火山と共生しつつづけている巨樹から、生命力を直接感じた瞬間でした。2000年の噴火による火山性ガスの影響で、山の本々の多くは白く立ち枯れていましたが、最近、緑色が増えてきているとのこと。これもまた、生命のチカラを直に感じることができました。



島一番のガイドさんは、環境・歴史の先生。三宅島の詳しい知識を教えていただきました。



溶岩が押し寄せた小学校。当日は、運動会の振り替え休日で休み。授業していたら、怖かっただろうな〜と、思わず感情移入!!

■ 島全体が教材—地球の成り立ちを身近に学べる島

三宅島は海岸線に沿って都道が円状で一周しています。山の手線とほぼ同じ大きさとのこと。三宅島を時計で例えると11時の場所(山の手線では「目白駅」あたり)にある伊豆岬は、満点の星を臨むことができるスポットですが、1万年前からの噴火の歴史を確認できる地層をみることもできるのです。

地球の成り立ちの一部をみたり、スコリアを手のひらにのせて触ったり、スダジイの巨樹に触れたり、様々な体験を通じて自然と環境の偉大さを感じた僕は、単に美味しい魚料理を食べることを期待していたことに恥ずかしさを覚えました。しかもそれが東京都にあるのです。新型コロナウイルス感染予防で三密回避などの新しい生活様式が求められていますが、昨年の夏の思い出は、今となっては、同じ東京都内での真逆の体験が強く心に刻まれた数日間でした。

(須田巧海・小川菜日留)



三宅島の黒い砂浜の秘密を知った!!
女優になりきって散策??



一瞬のサンセット風景…“映える”
大下先生の自慢のワンショットを拝借!!

